

田辺福麻呂「思娘子作歌」論

— 恋の「概念」を詠む —

太田 真理

一 はじめに

思娘子作歌一首 并短歌（娘子を思ひて作る歌一首 并せて短歌）

白玉の 人のその名を なかなかに 言を下延へ 逢はぬ日の まねく過ぐれば 恋ふる日の 重なり行けば
思ひ遣る たどきを知らに 肝向かふ 心碎けて 玉だすきかけぬ時なく 口止まず 我が恋ふる児を 玉釧
手に取り持ちて まそ鏡 直目に見ねば したひ山 下行く水の 上に出でず 我が思ふ心 安きそらかも

(9) 一七九二

反歌

垣ほなす人の横言繁みかも逢はぬ日まねく月の経ぬらむ

(9) 一七九三

立ち変はり月重なりて逢はねどもさね忘らえず面影にして

(9) 一七九四

右の三首、田辺福麻呂が歌集に出でたり。

ここにあげたのは、万葉集卷九、相聞部の最後に載せられている歌である。作者の田辺福麻呂は、万葉集卷十八の

巻頭歌（四〇三三）の題詞によれば、橋諸兄の使者として、越中に守として赴任していた大伴家持のもとを訪れ、彼の地の宴席で十四首の歌を詠んだ人物であることがわかる。¹その他に彼の経歴を知る手立てはないが、当時の権力者橋諸兄の台頭に伴って現れた「舎人的歌人」であったことは、橋本達雄氏の研究に詳しい。²福麻呂にはまた、万葉集巻六に二十一首、巻九に十首の歌がある。³その多くは遷都や行幸に関わるもので、いわゆる宮廷歌人的な歌である。⁴歌数や歌体、歌の性格からも、第四期を代表する歌人の一人と考えられるが、福麻呂より少し前の時代に活躍した山部赤人や笠金村に比べ、地味な印象の歌人であることは否めない。⁵中でもこの「思娘子作歌」は、福麻呂作品の中にあっても、関心をもたれることの少なかった作品である。

「思娘子」の「思ふ」とは、目の前にいない人を恋しく思うことである。研究史を繙いてみると、白玉（真珠）に譬えた娘子への恋の思いを言葉を重ねて詠んだこの作品について、『私注』は「枕詞ばかりが煩瑣で、ひどい作である」といい、窪田『評釈』は、「短歌で足りる程の事柄であるのに、さうした気分を現さうとして、語を尽して」、「古典的な語句、修辞法を濫用した」、「弱所ばかりを示した作」と評している。また、川口常孝氏は、

「娘子」の人間像はまったくあらわれていず、「娘子を思ふ」という概念が提示されているにすぎない。（略）
 おそらく燃焼という前向きな獲得を生きることでできなかった福麿という人格にとつては、自力を武器とする
 しかない恋は、苦手中の苦手であったのだろう。

と酷評し、福麻呂を「鈍感のうたびと」とさえ述べている。⁶

しかし、この歌はそのような欠点ばかりの歌なのであろうか。

概して低い評価しか与えられてこなかった中で、この歌に前向きな評価を与えようとしたのは伊藤博氏の『釋注』である。歌の解釈に、歌が詠まれた「場」という視点を導入し、恭仁京遷都のおり、官人たちの宴などの場で、官人たちが奈良（平城京）にいる娘子を思う気持を代弁して福麻呂が作った歌であると推定した。その上で、

もとより、「人の横言繁みかも」などは、恋歌ゆえの設定である。このような設定をせずに奈良京との隔たりを叫ぶと、大君の意志へのあらわな否定になってしまう。官人としては、思いもかけぬ久邇の住まいをかこつためにはこの形を取る以外に方法はない。あれやこれや、久邇京官人たちの妻恋しさを代弁して詠んだ作と見る時、よく理解が届き、またさような作としてなかなかよくできているのがこの長反歌であるように思う。

としているのは、この歌が詠まれ、集に採録された意味を考えるうえでも示唆深い指摘であるといえよう。

「思娘子作歌」という題詞のみからは、詳しい作歌事情を知ることが不可能だが、試みに同じ巻九相聞に収められた他の歌の題詞で、作歌事情の判るものを抜き出してみると、

振田向宿祢退筑紫國時歌一首 (⑨一七六六)

抜氣大首任筑紫時娶豊前國娘子紐兒作歌三首 (⑨一七六七)

大神大夫任長門守時集三輪河邊宴歌二首 (⑨一七七〇)

大神大夫任筑紫國時阿倍大夫作歌一首 (⑨一七七二)

石川大夫遷任上京時播磨娘子贈歌二首 (⑨一七七六)

藤井連遷任上京時娘子贈歌一首 (⑨一七七八)

鹿嶋郡苜野橋別大伴卿歌一首 并短歌 (⑨一七八〇)

天平五年癸酉遣唐使船發難波入海之時親母贈子歌一首 并短歌 (⑨一七九〇)

となっている。そのほとんどが、任官した官人が任地へ出かける、任果てた官人が都へ召還される、或いは天皇の命を受けた遣唐使が出かけて行く時などの、送迎に関わる歌であることがわかる。特に、一七七〇題詞に明記され

ているように、公務を帯びた旅の送迎の宴や、それに類する場で詠まれたことが想定できよう。そうすると「釋注」がいうように当該歌も、作者が宮廷歌人の福麻呂であり、作歌時期なども勘案すると、恭仁京に移住した官人たちが集まる宴の場で詠まれた歌であると推定するのは十分に可能である。

このような状況下で詠まれた歌であることを理解したうえで、改めて「思娘子作歌」という題詞のあり方を考えてみると、その内容に関してはまず、どんな「思ひ」が詠まれているのかに注目するのが自然なのではないだろうか。「思ひ」の内実に留意しつつ、歌表現のあり方を明らかにしていく態度が必要であると考える。

それをふまえつつ歌の表現を見直してみると、長歌では、「白玉の人のその名をなかなか言を下延へ」、「思ひ遣るたどきを知らに」、「肝向ふ心碎けて」、「直目に見ねば……上に出でず我が思ふ心安きそらかも」と、思う相手と逢えない日が重なり、大切な恋人の名を言葉に出すことさえ慎んで心穏やかでないことを詠んでいる。第一反歌ではその理由を、「垣ほなす人の横言繁みかも」すなわち人の噂が多いからだといひ、第二反歌では、逢えずに月日が重なっても思う人の面影が「さね忘らえず」と告白する。これらの表現は、全体として、恋する相手に人目・人言（噂）を気にして逢えない嘆きを詠んだ、万葉集相聞歌の典型を示していると言つてよい。

そもそも万葉集の長歌は、一般に「なによりも古代宮廷という場において制作が公的に要請されていた」もので、その基本的な構成は「長い叙述部分と短い心情部分によって成りたっている」とされる。⁷しかし、この「思娘子作歌」は、その「長い」叙述部分を排し、「短い」はずの心情部分を、恋情を主題として詠みあげた歌だということになる。

そうだとすれば、本来私的な恋の思いを、衆人に披露することを想定して「長い心情描写」を主題とする長歌体を詠むことには、何か特別な意図があったと考えざるを得ない。本論では、「長い心情描写」のあり方を再検討することを通して、この歌の持つ意義について明らかにしてゆくこととする。

二 娘子を「思ふ」、「恋ふ」

本節では、まず長歌部で繰り返し詠まれる「思ふ」「恋ふ」という表現に注目する。

当該歌の題詞は「思娘子作歌」であるが、相手に対する心情を表す歌のことばとしては「恋ふる日の 重なり行けば」「思ひ遣る たどきを知らに」「我が恋ふる児を」「我が思ふ心 安きそらかも」と、「思ふ」「恋ふ」が混在し、それぞれが二度ずつ用いられている。

「思ふ」も「恋ふ」も、共に眼前には不在の相手に対する思いをいうことばである。その相違について松田浩氏は、

「恋ふ」ことは、「眼前にいないところのあなた（あなたがいないという原因）」によって起こる動作・状態とすることができる。そのような原因によって促される（自発的なる）動作（もしくは状態）であるとするのに対し、「思ふ」ことは「より積極的に自己の意志による発動」であり、「その眼目は、自己が相手と共にありたいと希求すること——相手を自己の内にあらしめ現実にも斯くあらしめたいという思い——にある。

と明確に分析し説得的である。これに従えば、「恋ふる日の 重なり行けば（娘子が恋しく思えてしかたがない日が重なったので）」「思ひ遣る たどきを知らに（憂いの思いを晴らすすべも知らず）」「我が恋ふる児を（恋しくてしかたがないあの娘を）」「我が思ふ心 安きそらかも（私が思う心は平安なものか）」となり、この四句を繋ぎ合わせただけで歌意も明らかに理解することが出来る。

一首の中に「思ふ」と「恋ふ」をともに詠みこむのは、他の長歌にも例がある。

蜻蛉島 大和の国は 神からと 言挙げせぬ国 然れども 我は言挙げす 天地の 神もはなはだ 我が思ふ
 心知らずや 行く影の 月も経行けば 玉かぎる 日も重なりて 思へかも 胸安からぬ 恋ふれかも 心の
 痛き 末つひに 君に逢はずは 我が命の 生けらむ極み 恋ひつつも 我は渡らむ まそ鏡 正目に君を 相
 見てばこそ 我が恋止まめ (13)三三五〇・相聞)

白雲の たなびく国の 青雲の 向伏す国の 天雲の 下なる人は 我のみかも 君に恋ふらむ 我のみかも
 君に恋ふれば 天地に 言を満てて 恋ふれかも 胸の病みたる 思へかも 心の痛き 我が恋ぞ 日に異に
 増さる 何時はしも 恋ひぬ時とは あらねども この九月を 我が背子が 偲ひにせよと 千代にも 偲ひ
 渡れと 万代に 語り継がへと 始めてし この九月の 過ぎまくを いたもすべなみ あらたまの 月の変
 はらば せむすべの たどきを知らに 岩が根の ころしき道の 岩床の 根延へる門に 朝には 出で居て
 嘆き 夕には 入り居恋ひつつ ぬばたまの 黒髪敷きて 人の寝る 甘睡は寝ずに 大船の ゆくらゆくら
 に 思ひつつ 我が寝る夜らは 数みもあへぬかも (13)三三二九・挽歌)

当該長歌において、娘子に逢えない状況で希求するのは「直目に見」ることであるが、その実現を願いつつも娘子に對する感情は、言わば自己のコントロールがきかない「恋ふ」(自発)とコントロール可能な「思ふ」(意志)の間を往復し逡巡する。これはまた、

世の中は常かくのみと思へどもかたて忘れずなほ恋ひにけり (11)二三八三・人麻呂歌集)
 我妹子に恋ひすべなかり夢に見むと我は思へど寝ねらえなくに (11)二四二二・人麻呂歌集)
 思へども験もなしと知るものを何かこごたく我が恋ひわたる (4)六五八・坂上郎女)

といった歌でも、「世の中はいつもこうだと思おう（意志）」としても、なおも恋してしまふ（自発）」（二二三八三）、「恋が募つてすべもなく（自発）、恋心を鎮めるためにせめて夢だけでも逢えるように、夢に見ようと思ふ（意志）けれど眠れない」（二二四一一）、「思つても甲斐がないと知つてはいても（意志）」どうしてこんなにも恋つづけてしまふ（自発）のだろう」（六五八）とあるが、恋に戸惑い、なんとか理性的な意志を持つて対処しようとするが叶えられず、結局、却つて増幅した恋に引き戻されてしまふという心の綾が、人の心情の性としてある種の諦念を持つて詠み表わされることと共通している。

その「思ふ」と「恋ふ」の狭間を感情が揺れ動く過程で、初めは「白玉の 人のその名を なかなかに 言を下延へ」と、恋人の名を口にするタブーを固く守つていたはずの男が、逢えない日が長く重なつたことにより「玉だすき かけぬ時なく 口止まず 我が恋ふる」と、タブーをも破る混乱した状況を呈している。その時の男は「肝向ふ 心碎けて」という状態に陥つてしまつていた。「思ふ」、「恋ふ」の主体である男の、心のあり方に言及されている点は注目すべきであるといえよう。

「心が碎ける」という表現は、集中には他に四例がある。

むら肝きまの心碎けてかくばかり我が恋ふらくを知らずかあるらむ

（④七二〇・家持贈娘子歌）

雨降れば激たぎつ山川やまがは岩いはに触れ君が碎けむ心は持たじ

（⑩二三〇八・問答）

聞ききしより物を思へば我が胸は割れて碎けて利心とこころもなし

（⑫二八九四・正述心諸）

…恋しくに 痛き我が身ぞ いちしろく 身にしみ通り むら肝の 心碎けて 死なむ命 にはかになりぬ…

（⑬二三八一一・恋夫君歌）

これらは「心も碎けるようにこんなにも恋しているのを」（七二〇）、「あなたが心を碎いて心配するような心を私は持たない」（二二三八）、「物思いで胸が割れ、砕け、しっかりした心も無い」（二八九四）などと、いずれも恋ごころ

が極まって張り裂けんばかりの心の状態を示している。さらに、三八一番歌では「心は千々に乱れ、死に向かうこの命も切迫してきた」と、その恋によって生命が脅かされるほどの状況に追い込まれていることがわかる。当該長歌においては、一たんタブーをも犯しかねない混乱に陥りながら、平静な心には程遠いものの「したひ山 下行く水の上に出でず 我が思ふ」と、恋心を表に出さずに思いつづけるという着地点を見出している。

次節では、「思ふ」、「恋ふ」の間で問題となる「心」のあり方について、掘り下げて行きたい。

三 「思ふ」、「恋ふ」心

「思ふ」、「恋ふ」とその間に揺れる「心」について考えるにあたり、「思娘子作歌」と多くの共通点を持つ歌として、前節の最後でもあげた次の歌をとりあげたい。

恋夫君歌一首 并短歌

さにつらふ 君がみ言と こと 玉梓の たまじり 使も来ねば 思ひ病む 我が身ひとつそ ちはやぶる 神にもな負ほせ うら
 部据ゑ 亀もな焼きそ 恋しくに 痛き我が身そ いちしろく 身にしみ通り むら肝の 心碎けて 死なむ
 命 にはかになりぬ 今更に いまさら 君か我を呼ぶ たらちねの 母の命か 百足らず 八十の衢に 夕占にも 占
 にもそ問ふ 死ぬべき我が故

反歌

卜部をも八十の衢も占問へど君を相見むたどき知らずも

或本反歌曰

我が命は惜しくもあらずさにつらふ君によりてそ長く欲しせし

(16) 三八一二

(16) 三八一三

まず、「恋夫君歌（夫君を恋ふる歌）」という題詞の形式の簡潔さが第一の共通点としてあげられる。この歌には左注があつて、夫の訪れが絶えてしまった女が、恋の思いに沈むあまり身も瘦せ衰え、死に瀕して詠んだ歌であるという物語的な由来がわかる。「玉梓の 使も来」ないので逢えない、「思ひ病み」、「恋し」といった心の動きの中で、「心碎けて」という状況に陥つた結果、女は生命の危機に瀕することとなる。夫に逢えることを願つて占いをするけれども、なお「相見むたどき知らずも」と絶望した女は、漸く夫が帰り対面が叶うものの命を落としてしまつたというのである。歌に傍線を施した箇所のように「思娘子作歌」との共通の詞句を持つ。夫の心離れという原因の違いはあれ、思う人に逢えない嘆き、苦しみをひたすらに相手に伝えたい一心で詠んだ、同質の歌と考えられる。「思娘子作歌」の表現からは、川口氏のいうように「娘子」の実像がうかがわれるような表現はたしかに見当たらない。そしてまた、「恋夫君歌」にしても、歌には夫君の人間像をうかがひあがらせることは見られない。

しかしこの歌では、夫を恋するあまり心がコントロールの許容範囲を超えて碎けてしまつた結果、母親のまじみや古いの効果も無く、命をおとしてしまうという悲劇を歌で語る。夫の訪れの途絶えから「思ひ病」み↓「恋し」↓「心碎けて」↓「死なむ命 にはかになりぬ」という流れは、「思娘子作歌」に比べると心が平衡を失つていく様子がストレートに描写されている。¹⁰これを「思娘子作歌」と同様に、「長歌の『長い』叙述部分を排し、『短い』はずの心情部分を、恋情を主題として詠み上げた歌」だと考えると、二首の長歌に共通する特色を理解することができるのではないだろうか。

すなわち、『娘子』の人間像はまったくあらわれていず、『娘子を思ふ』という概念が提示されているにすぎない。（川口前掲論文、傍点・太田）ともたれようが、「思娘子作歌」は、長期に亘つてひたすらに「娘子を思ふ」という「概念」を詠むことにこそ重点が置かれた歌であつたといえ、「恋夫君歌」も、夫の訪れが絶えた後もひたすらに「夫君を恋ふ」という「概念」を表現しようとした歌であつたと考えられるのではないだろうか。言い換えれば、どんな容姿の誰に思いを寄せるのかという具象の歌ではなく、どのように相手を思い、恋するか、「思ふ」こと「恋ふ」こととはどういうことかを主題とした観念の歌であるということができよう。

そのうえで「思娘子作歌」に戻ると、福麻呂はなぜ、何かしら「公」の宴の場で「娘子を思ふ」という概念を「秘めたる恋の歌」のかたちで詠む必要があったのだろうか、その点に考察を進めたい。

四 恋の客観化

福麻呂の「思娘子作歌」が「娘子を思ふ」という恋の「概念」を詠んだ歌であるとすれば、万葉集中で他に恋の「概念」を詠む歌としては、どのような歌を指摘することができただろうか。

一般的に万葉集の持つ「素朴、写真」というイメージからすると、その初期には実際の恋愛の場において、恋の思いを相手と通わせようとする目的で情熱的に表現した現実的な歌が詠まれて贈答され、やがて時代が下ると恋の概念を客観的に詠む歌が生まれていったというような印象があるかもしれない。しかし集中では、「恋ふこと」「思ふこと」の概念を詠んだと考えられる歌として、次のような歌が存在する。

巖いはほすら行き通るべきますらをも恋こひといふことは後悔のちくいにけり

(11) 三三八六・人麻呂歌集

恋ふること慰めかねて出でて行けば山を川をも知らず来にけり

(12) 二四一四・人麻呂歌集

天地の神をも我は祈りてき恋といふものはかつて止まずけり

(13) 三三〇八

この他に、「恋すると○○○(という状態)になる」という概念を詠んだ歌や、恋することを「道」と捉えた歌もある。

恋こひするに死しするものにあらませば我が身は千度ちかひ死に反らまし

(14) 二三九〇・人麻呂歌集

大地おほつちは取り尽くすとも世の中の尽し得ぬものは恋にしありけり

(15) 二四四二・人麻呂歌集

古ゆ^{いにしへ} 言ひ継ぎけらく 恋すれば 苦しきものと…

我ゆ後生生まれむ人は我がごとく恋する道にあひこすなゆめ

⑬三二五五
⑪三三七五・人麻呂歌集

この中で、二三九〇には、「恋すること」を「思うこと」と言い換えた

思ふにし死するものにあらませば千度そ我は死に反らまし

④六〇三・笠女郎

という歌も指摘できる。「恋ふこと」、「思ふこと」を概念として詠んだと考えられる歌は他にもあるが、ここにあげた中で卷十一の五首はいずれも柿本人麻呂歌集の歌である。また、卷十三は、集中でも古撰の巻と考えられており、ここにあげた二首も比較的古い時代の作であると考えられる。

これらの歌からは、「恋といふこと」(二三八六)「恋ふること」(二四一四)「恋する道」(三三七五)などと恋を對象化して把握しようとしたり、「恋するに死するものにあらませば」(二三九〇)「恋すれば 苦しきものと」(三二五五)「思ふにし死にするものにあらませば」(二六〇三)など、恋すると一般的にどのような事態に陥るのか、当時の人々に共通した認識があったことがうかがわれる。恋の概念を客観的に詠んだ歌は、少なくとも人麻呂の時代(万葉集第二期)までさかのぼることが出来るのである。

また、「かかる恋」という詞句を詠みこんだ次のような歌もある。

事もなく生き来しものを老いなみにかかる恋にも我はあへるかも

④五五九・大伴百代

黒髪に白髪交じり老ゆるまでかかる恋にはいまだあはなくに

④五六三・坂上郎女

玉梓の道行かずあらばねもころのかかる恋にはあはざらましを

⑪三三九三・人麻呂歌集

白たへの袖をはつはつ見しからにかかる恋をも我はするかも

⑪二四一一・人麻呂歌集

梓弓あきさゆみ引きてゆるさずあらませばかかると恋にはあはざらましを

(11)二五〇五・人麻呂歌集

これも、恋を具体的に描写するのではなく、恋の程度の甚だしいことを「かかる恋」という一語で把捉しようとするものである。集中に全五例、そのうち三例が人麻呂歌集の歌で、恋の客観化が人麻呂の時代には意識的になされるようになっていたことを物語つていよう。

これと同様に「思ひ」を客観化し、把握しようとした、

はじめより長く言ひつつ頼めずはかかる思ひにあはましものか

(4)六二〇・坂上郎女

我が思ひかくしてあらずは玉にもがまことも妹が手に巻かれむを

(4)七三四・家持

などの歌もみられる。そこには、「恋ふこと」「思ふこと」とはどのようなことなのかを、心のあり方の問題として追及する姿勢があらわれているといつてよい。

人麻呂歌集の歌については、稲岡耕二氏に、『柿本朝臣人麻呂歌集』詩体歌部（人麻呂歌集の研究において、「詩体歌」「古体歌集」「略体歌集」などと呼ばれてきた歌群をさす。）一巻を「わが国における歌集の嚆矢」と捉え、恋歌の類聚の意味について「それは、新宮都（飛鳥浄御原新京・注太田）の官人のための歌の範例集であり、（文字の歌）の表現技法の手引きだったと考えられます。」とする論がある。まさに、万葉集の比較的早期に心の主題化の試みがなされたことの指摘として首肯される。

以上述べてきたことより、「恋ふこと」「思ふこと」の間を揺れ動く心のありようを探りつつ、「娘子を思ふ」という「概念」を詠むことそのものが当該歌の目的となり得たことは明らかである。人麻呂歌集歌のように、短歌で端的にいうだけではなく、長歌体を用いて練り上げたものであると考えられ、その試みは達せられたものと考えられるが、当の「恋心」は「我が思ふ心 安きそらかも」と、なおも惹起される心の不安定さをもって歌い収められてい

るのは興味深い。

五 おわりに

「思娘子作歌」の二首の反歌では、娘子に逢えない理由として「人言」即ち人の噂が激しいからだとし、逢えない日々が長くはなつたけれど、思う娘子が面影に見えて忘れられないという表現で変らぬ思いを詠んでいる。それは、長歌の結びでなおも「安きそらかも」とされた「我が心」を慰撫するための疏解であった。

第一節でも確認したように、恋する二人きりの閉じた空間で贈答されたというより、何かしら公の場、伊藤『釋注』によれば平城京を離れて独り寝をかこつ男たちの宴のような場で、それぞれの「娘子」に対する「秘めたる恋の思い」を心に浮かべつつ、場の人々に共通する心情としての「恋の思い」を歌にしたのが、この作品であったといえよう。この作品のそうした目的の上にあつて、具体的な「娘子像」を持たないことと、恋情の共有性とは両立すると考える。

「恋」を客観視するとともに、「恋」の不可思議さや、「恋ふ」と「思ふ」、そしてその間に揺れる「心」への興味関心を歌にしたものであるといえ、**「鈍感」な作品**という評価はあたらなひであらう。

それは、当該歌に先行する人麻呂歌集歌などにみられる恋を観念として捉えようとした歌の流れを汲むものであつて、それを個人的な心情に留まらせず、人々に共有される心情として体現してみせたのが、当該作品の持つ意味だったのである。

※『万葉集』の本文は、新編日本古典文学全集（小学館）に拠つたが、別のテキストを参考に改めた箇所がある。また、万葉集の注釈書については、通行の略称を用い記した。

注

- 1 万葉集卷十八巻頭歌（四〇三二）の題詞には、「天平二十年春三月二十三日に、左大臣橘家の使者造酒司令史田辺福麻呂に守大伴宿祢家持が館に饗す。ここに新しき歌を作り、并せて便ち古詠を誦み、各心緒を述ぶ。」とある。
- 2 橘本達雄「田辺福麻呂―橘諸兄との関連―」『万葉宮廷歌人の研究』笠間書院、一九七五年二月
- 3 「思娘子作歌」を含め、何れも「福麻呂歌集」の歌として載せられているが、本論では通説に従い、それらがすべて福麻呂本人の作であるという立場をとる。
- 4 歌々の題詞から察すると、福麻呂の作歌時期は、天平十三年（七四一）の恭仁京遷都から、十七年（七四五）の間のごく短い期間である。
- 5 万葉集の時代区分については、全体を四期に分ける、澤瀉久孝・森本治吉著『作者類別年代順万葉集』の区分による。
- 6 川口常孝「田辺福麻呂論」『万葉歌人の美学と構造』桜楓社、一九七三年五月
- 7 多田一臣編『万葉集ハンドブック』三省堂、一九九九年十月、第四部『万葉集』の表現と用語、『万葉集』の用語、「長歌」の項（項目執筆・近藤信義）
- 8 松田浩「恋ふこと・思ふこと―『万葉集』におけるその連関―」『三田國文』第二七号、一九九八年三月
- 9 「恋フこと」が制御不能であることについて、鉄野昌弘は「恋フことの本質は、我が心が暴走し相手にまわりついて離れない、自分で制御不可能である、というところにあるのではないだろうか。意志に反して、自然とそうなってしまう―本来の意味での『自発』的なものとして、萬葉びとにとつての恋フことはあったと考えたい」と論じ、「心の暴走」と捉えている。（「恋はずべなし」『文学』第八巻第五号、岩波書店、二〇〇七年）
- 10 「恋夫君歌」では、心の問題に加えて、「身」「我が身」という身体そのものもあり方も詠まれている。心と身体の関係性や、平安時代（古今集）以降の和歌に頻繁に詠まれる「身」意識との関連からも、とりあげて論ずべき問題であるが、今回は紙幅の都合により触れない。稿を改めて論じたいと考えている。
- 11 稲岡耕二「萬葉集への案内③」『和歌文学大系3 萬葉集③』明治書院、平成十八年十一月